

## 学芸大学木工研究室より

新海 洸 / 東京学芸大学 教授

新海先生は、授業では様々な塗装の技術を教えている。なかでも専門は『漆』で、日本の漆に限らず、アジア各国の漆を見て回っている。お話を伺った時も、アジアにおける漆の現状やブータンの木の器、“ポップ”の話をしてくださった。(→?) 「教育現場において、伝えていきたい木の良さ」を尋ねると“物の好き嫌いは、決して強制するものではないから、木のこれが良い!と教えたりはしない。合成樹脂が好きな人も良い、人間ですから。特に日本は資源が少ない国だから、色々な工夫をし色々な資源を生み出してきた。そのようなサイクルに疲れちゃった人は、どうぞ木にいらしてください(笑)。木は手仕事が多く、また資源も限られているから、それでバランスが取れるのかもしれない。”と、ゆるやかなながらも鋭い答えが返ってきた。

漆塗りの木は一見黒い物体。だが、そこに木の良さを感じる人もいる。良さの感じ方も人それぞれ。子ども達には、物事の様々な違いを示してあげるのが大事だと語る。

現在、新海先生は本の出版準備をしている。30年ほどかけて集めた、色漆の絵を紹介する本だ。江戸時代に多く描かれたこれらの絵には、独特の味わいがあるらしい。しかし、当時としては安い代物だったため、沢山生産されつつも要らなくなったら処分されたりと、現存する物は少ないとのこと。出版は年度末を予定。

(八重樫)



↑春休みにも関わらず、研究室は制作をする学生で賑わう。ポーズのリクエストが殺到。

## 木活プロジェクト 研究月報

<http://www.u-gakugei.ac.jp/~w-woods/contact> >>> [w-woods@u-gakugei.ac.jp](mailto:w-woods@u-gakugei.ac.jp)

2005MAR > 10

### ? “ポップ” とは?

人々が普段常に持ち歩いて使う器。友人の家を訪れた際も、自分のポップでお茶を頂く。ポップの木目の美しさを自慢し合ったりするそうだ。家族代々引き継いで使っている人のポップは、なんとも言えない光沢を放っているらしい… (新海先生談)



写真2

## 西条で見つけた逸品 「盛枧 (もります)」

先月号 vol.9 に引き続き、広島からの木の話。取材中に出会った、暮らしの中の道具をご紹介します。

盛枧は、使い手がゆっくと創り上げたデザインなのであろう。麴米のための計量用の枧(約1.5~2.5Kgの容量)なのだが、写真1のように片手で計量しつつ分配できるような持ちやすさの工夫がある。枧に一つだけポッカリと開いている親指を入れる穴はもちろんだが、手に持つと、写真2の底面の部分にある指かけが、しっくりと中指と薬指にかかる。左右のバランスは、ボーリングの玉を操るように、人差し指と小指の仕事となる。さらに、写真3で確認できるように、枧の縁が、しっかりとデザインされていることに感激した。麴米を計り取る際に、米をつぶさないように、持ち手側が厚く、逆側は、シャープに削いでいるのである。

酒づくりの人々の知恵から生み出された感動的なデザインに出会えた、東広島西条でした。(鉄矢)



写真1



写真3